保育作用の積極的方面

倉橋惣三

私が此の題目をえらみましたに就いて特に御注意を願はねばならぬ點は、之れからお話することが、保育作用の積極的方面といふのでありまして、保育そのものゝ積極的方面と云ふのではないことであります。之は保育の積極的方面といふことが其の事として意味をなさぬのではなく、保育は元より積極的なものであるから特にこんな問題は起らないのです。其處に誤解があると根本的に誤謬を生じます。保育は云ふまでもなく教育で、教育は勿論積極的なものであるからそれを特に云ふ必要がない。若し世に誤解あり教育は積極的、保育は消極的といふ様な考へ、又はそれと誤り易き考へがあるとすれば、それは大きな間違であります。これまで教育に、子供に對する無理な傾向があつたので、その反動の形で教育は兒童の自然の發展を尊重するから、餘計な干渉を加へたり、大人が餘り持ちかけたりするのはよくないと云ふことは、所謂新しい教育論の起つて來た理由に相違ないのですが、それだからといつ

て、元來教育そのものゝ持つ積極性が一厘一毛でも緩む由はない。新しい教育の歴史に溯ぼれば誰でもルソーを云ひます。ルソーの「エミール」を讀むと誰れでも愉快を感じ快哉を叫びますが、それは何處にあるかを分解すれば、古い教育の世界が子供に無暗に干渉することを意識的或ひは無意識に不滿としてゐた反動であつて、その爲に非常に解放された氣持がするのです。しかも從來の教育が往々子供の自由を束縛することに對し何人も不滿足を感じながら、それを徹底して考へなかつたのは何處に理由があるのかを考へて見れば、或はその人が問題を溯つて見つめる力がないからか、考察の努力が足りなかつたといふことにもよりましようが、併しそういふ點を除いて考へれば、つまり從來の教育作用が作用として餘り干渉しすぎてゐたので、それに不滿不快を感じてゐたのであります。

ところが、斯うした惑ひを持ちルソーに向ふ時、その快哉の結果は滑べり出した雪のなだれが止めどもなく滑り落ちる様に、教育作用の消極性から教育の本質の積極性までをも引き下げて快哉としたりします。しかしながら、もつと本當に「エミール」を讀めば、教育そのものゝ本質としての積極性を決して否定して居ない事が分ります。

さて、小學校以上になると、教育の積極性が強く吾人を動かすから甚だしくそれを見落す

事はありませぬが、幼稚園教育では往々危險が起つたりします。即ち小學校教育は作用の消極性を承認しても、教育そのものを消極的と考へる人はない。しかし幼兒教育ではそこがあやふやであります。作用の消極性を是認することから、づるづるに本質の積極性まで見失ふものが、事實として必ずしも少なくないのであります。

之に就いては、何故小學校と幼稚園に於て同じ教育でありながら、斯うした違ひが起るかを更に進んで考へねばなりませぬ。その理由に二つあり。一は小學校教育では教育目的が色んな形で余程明つきりして居ります。或ははつきりし過ぎる位、大極に於ても部分に於いても確立してゐるので教育目的が頭に響いて來るから作用がそんなに消極的にはならない。それにくらべて、幼稚園では教育目的が大まかであるから前述べた樣な誤謬が起るのだと考へられます。

これが是認されたとして、次につきつめねばならぬのは、教育目的が大まかにあることは何に基づくか、此處に既に消極的な本質があるとすれば保育の本質も亦消極的となるのですが、保育の目的は決していゝ加減あいまいなものではありませぬ。五厘霧中のやうなものではありませぬ、しかも大まかと感じられるのは何故かといふに、小學校では子供の生活自體と教

育とが大分離れる性質になつてゐるから、子供の生活自體、人間の生活それ自身、即ち人生の目的それ自身と多少區分し、細かく分れることになりますが、幼稚園では人生の目的さながらを以て目的と致しますから、幼兒に要求してゐることは積極的でありますが、教育目的として、はつきりしないだけのことだと私は解釋して居ります。兎に角斯う云ふ具合に考へる時に、幼稚園の教育目的は、教育目的の形でこそ甚だしくはつきりしては居ないが、目的のバックとしては決して小學校教育に比べて何等消極性といふ様な腰の弱いものではありませぬ。小學校教育は實に積極的なもので、幼稚園教育は非積極的即ち、どうでもいゝ様なものだとすれば、皆様は決して承知出來るものではない。

然しながら此の積極的な保育といふことの目的を實現するために、作用も必ず積極的でなければならぬかと云ふに、そうとも限りませぬ。例へば他人に對しての親切好意は人間的態度として積極的なものですが、その好意を持つ時、必ずしも積極的に出るばかりとは限らない。常に傍からおせつかいばかりする譯ではない。非常な親切、好意から、わざと打つちやつておき、爲すがまゝに任せる事もある。それで保育作用としては必ずしも積極的なものに限りませぬ。

こゝで幼稚園の歴史を見ますと、作用として余り積極的であつた事に（保育の誤りでなく作用の）誤りがあつた。更に突つ込んで皮肉な考察をすれば、作用も積極的な事を敢へてしたといふ事のみならず、保育そのものの積極性を十分持つてゐないために、却つて作用として積極的となつたのではないかとも云へます。之れは我々日常生活にも往々ある事で、心の缺けてゐる時に外への仕方が却つて積極的になることは、屢々經驗する所です。保育の熱心から作用が積極的となつただけでも惡い事だが、更に保育本質そのものにある或るうつろから作用だけ積極的になつたのでは、誠に憂慮すべき事であります。それで大體の根本として、ものの眞實に着かうとする近世教育は、作用としての故意な積極性に眉をひそめて來だしたのです。今日の新らしい教育論は教育方法の問題で、或は兒童の心理に基いた所にあると申して居りますが、私は決してそれ丈ではない、相手の研究に由つて生じて來たといふよりは教育自身の眞實を發輝せんとするものであると思ふ。現代は昔の形式主義に比べて生活主義を存分に充實させて行かうとすると見るものであります。昔は作用の積極性でごま化して行く暢氣な時代であつたかも知れぬが、現代は形式的の充實主義は自分自身に氣恥づかしくなつて來たのです。今の教育の一傾向が消極主義、自由解放的なのは何に基因するか。多くの人は言

ふ「何うも此の頃の若い人は横着で、」「不精で！」と。これでは簡單すぎて問題にならない。彼等は自分の保育に對する本質の積極性を見つめて居るが、それ以上の積極性を取る事が自分に對して氣恥づかしいので作用としての積極性を避けてゐるのだと良解される所がある。ところでこれは眞實に類することではありますが、弱い意氣地のない眞實だと思ひます。十分の敬意を拂ふことは出來ない、この人々は保育の積極性を十分養ふことが必要と考へられる。それを十分に持つことから出る消極作用でこそ、始めて意義を持つのです。この事はこの講義の本論ではなく、疾くに、分つて居るべき事ではありますが、今度の如く積極的方面などと云ふ時、言葉を用ゐましたに就て、念の爲一度明かにして置く譯です。

これをお斷りしておきまして、偖て、保育作用の積極的方面、消極的方面はどこに違ひがあるのかを申述べ度い。

○

一體、消極的、積極的といふ事は概念としての對立であつて、實際の中に別個に分れて居るものでない。そこでも一度御注意を促し度いのは方面といふ字であります。何處の幼稚園は積極的、どこの幼稚園は消極的とはつきり分れるものではない、例へば自由といふ言葉は

新幼稚園の通り言葉でありますが、一體何でありますか。この語自身が積極、積極の二方面を持つて居ります、なるべく子供を自由にさせて置くといふ事が、若し、子供に及ぼす凡べての影響から切り放すことゝすれば、それは消極的に解釋してゐるのであります。即ち若しも我々が子どもに自由を與へると稱して、不自由から解くことだけならば消極的なものです。但、その消極的方面、決して無用ではありませぬ。教育學の極く簡單な本にもある如く、子どもの發達を妨げてゐる樣な環境それを取り除いてやるのも大きな教育の任務であります。石にひしがれた草の芽が伸びられないで居る、本來の成長を妨害されて居る。これが現在の兒童生活の中にある狀態とすれば、矢張り私達は、それを取り除くことに力をいたさなければなりません。

然しながら單にこれだけで終つて居るなら消積的效果のみで積極的効果が現れぬ、惜い事であります。幼稚園生活で子供を束縛から解放する他に、幼稚園に來る事によつて生活全體の積極的發展が與へられなければ、保育の目的を充分に達したとは云へません。

（以上は今夏文部省講習に於ける倉橋氏の講演の序論の大要筆記であります。文責在記者）